

新 歌人群像

山田あき

気高き精神と愛の生涯

山本 司



山田あき（本名・坪野ツイ）が、自分の人生の特徴を表出したと言ってよい作品に、

ひとすじに貫くは何とそれのみを守り来しなる愛また思想 『牀上の月』

みずからの選択重し貧病苦弾圧苦などが財として 『飛泉』

がある。この二首が語っているように、山田あきの人生観における気高い精神と深い人間愛は、これまでの女性歌人の追隨を許さないほどの、稀有な存在を示していると言えよう。

絶たれた音楽家への夢

山田あきは、一九〇〇（明治三十三）年一月一日に新潟県東頸城郡浦川原村菱田で、父・村松茂三郎、母・いつの五女（七人兄弟）として生まれた。生家は村を支配する大地主で、長兄が東頸城郡村長会長を歴任したほどである。また、浦川原村は稲作地帯で保倉川が流れており、東方には東頸城丘陵と越後山脈が、遙か南西には妙高山が眺められる。あきが「故郷の山河は美しい」と記しており、自然環境はとても気に入っていたのであろう。ところが、当時の家父長制度による母の惨めな様子を見ながら、女中・つじの自由な愛



妹・妙子（右）と（高田高等女学校の頃か）

情の影響を受けて成長したあきは、女学生時代に当時の社会的矛盾に対する密かな疑問を抱くようになって行くのであった。

妙高の山の裾回到泣きたりしわれのこの山見れどあかなく

『流花泉』

両親との諍い等々で泣いたこともあったであろうが、あきにとつて生涯忘れぬ事の出来ない、少女期の悔やみ切れない思い出がある。家庭教師がついて琴や三味線などを習っていた山田あきは、高田高等女学校に入学（一九一一年）した三年間、バイオリンの特別教授を受け、学校創立以来の才能と期待され、女性としては極めて珍しいと言える音楽家を志望。娘がそうなる事を嫌った父は、奈良女

子高等師範学校推薦入学を阻み、卒業と共に、即、京都大学医科研究室に勤めていて、将来は宮中入りするだろうと囁望されていた医学者と結婚させた。あき、十五歳の春である。

この強制結婚は不仲となり、一九二六（大正十五）年十一月に協議離婚となった。その仔細の内容は判らないが、一九二二（大正十一）年に小泉荻三が創刊した「ポトナム」の中に社会科学研究会が組織され、あきの義妹・南文枝が参加しており、その影響で共産主義運動に山田あきは参加して行ったのではないかと思われる。一九二九（昭和四）年に犠牲者救済会（治安維持法等で弾圧された人々の救済活動の組織）の運動に従事したことで検挙される。

また、短歌との関わりでは、長兄・正治（筆名・苦行林、与謝野晶子門下）の影響もあるが、一九二三（大正十二）年に早稲田大学に入学していた弟・英治が窪田空穂門下となっており、早稲田大学の歌会に山田あきを誘ったと思われる。その会で、あきは渡辺順三と出会ったのであろう。あきは、一九二九年六月にプロレタリア短歌運動に参加した。

貧病苦・弾圧苦の中を

プロレタリア歌人同盟に加入した時の筆名は南信乃で、当時は自由律短歌と称する作品、レーニン額の下にキチンと座り、すばやく××を受取った同士の厳肅な顔が何て気に入つたろう 「短歌前衛」一九三〇・四等々がある。その南信乃と坪野哲久（本名・久作）は、それぞれの思いで関心を寄せていた。短歌運動の渦中、順三宅で運命的出逢いを迎え、結婚するに至つたようである。二人は一九三二年三月に結婚したが、

はばまれし婚なりきこの身貧しくて明日なかりしに君はきたりぬ 哲久「人間巨著」

と言う作品が語っているように、あきの父は勿論のこと、長兄・正治の猛反対によって、山田あきは勘当同然の状態を迎えた。その後、哲久は妻・あきの郷里には一度も訪れることはしなかった。あきは戦後になって帰郷できるようにになったようである。結婚した当時、哲久が戦旗社の非合法部門に従事していたために、同年八月に二人とも検挙された。翌年の夏頃に哲久が東京ガスの争議中に検挙・留置され、釈放になって間もなく結核に罹って咯血、三年間の病床生活に入る。

この間あきは、仕立ての仕事や女工、雑誌

山田あき



東京・目白坂の家の前で。前列左より坪野哲久、坪野次六（哲久の父）、あきと長男の坪野荒雄（1938年）

社勤務などで生計を支え、夫妻でプロレタリア短歌運動の推進を始め文学活動に努力するのであった。この頃（一九三四〈昭和九〉年）のあきの作品に（印は行変え）、

血を略いて／病みふす夫に留守をたのみ／雨げぶる街を金借りに出る。

合同歌集「世紀の旗」

がある。この一首だけで、当時の生活状態は想像できよう。哲久夫妻の生涯の生計のほとんどが、あきの献身的な努力・奮闘で支えられ、まさしく、貧病苦・弾圧苦と闘いながらの文学と社会運動の生活であった。

坪野ツイは、ほぼ定型律に戻った（「短歌評論」時代）頃から、故郷の風景や四季を偲んで筆名を山田あきに変更している。

その後、一九三五（昭和十）年春頃から二人で練馬街道に焼鳥の屋台を出し、翌年一月には短歌運動の新たな探究を目指して哲久と共に歌誌「鍛冶」を創刊。同月十八日に長男・荒雄を出産。その頃について、

腹の児の胎動確かなれば心強し汗した
たらして焼鳥焙る
「鍛冶」創刊号

と詠じていた。焼鳥の屋台を畳んだ夫・哲久が勤めては胸部疾患再発を繰り返す状況の中で、あきは仕立て屋を営んで生計を維持していたようである。だが、時代は二人を過酷な貧病苦だけに留めて置かなかつた。

留置場よりもどれるきみをかい抱きし
五たび六たび思ひはつきず
「紺」

日本は遂に、一九四一（昭和十六）年十二月八日に太平洋戦争に突入、国内の戦時態勢と弾圧は極点に達した。翌年三月三十一日に自宅捜査を受け、病臥中の哲久が治安維持法をもとに検挙されたのである。あきの機敏な対処で貴重な文献等は秘匿された事と、「鍛冶」同人・渡辺久二郎の無私の懇請に心動かされた齋藤瀧の働きかけがあつて、「鍛冶」廃刊と執筆禁止、保護観察下に置くという条件付で、哲久は仮釈放となり一命を取り留めた。

終日の特高の監視によって、心身共に「自殺一歩前」の危機的状況に陥った哲久を支え、あきは弾圧苦を抱えながら敗戦を迎えた。

戦後の文学活動と諸運動

敗戦後のあきは、煎餅焼き・家政婦などの仕事に就くと共に、一九四六（昭和二十一年）四月に「人民短歌」へ参加、夫と共に「鍛冶」を復刊、新歌人集団結成にも参加するなど旺盛な文学活動をいち早く再開した。

歌よみの惨敗の記憶なまなまし傍観は
常にわれをゆるさず
「紺」

焼原の薨の下より萌え出づるやみがた
き草の力を信ず

これらの作品に、当時のあきの作歌心情―戦争動員の推進者とさせられた短歌界への批判と己の決意。敗戦後の民衆への信頼―が詠われている。あきの戦後の原点とも言えよう。

文学もてぬるき刻かほころびし兩具ひ
きまとい砂川へ行く

「鍛冶」一九五六・十一、十二合併号

アジア・アフリカの友らつどいきおも
おもと降りて鎮る三月の雪
「飛泉」



東京・経堂の自宅前での哲久・あき夫妻（1966年）

被爆者の現身うつしみのあぶら石を灼きそを撫
でしわれ永遠とわのつみびと
『流花泉』

変革の胎動燃えてやみがたし日本列島
弓なりに反る
『山河無限』

加害者の無惨を持して来しわれに中国
青年の礼いふかき眉
『牀上の月』

等々の作品が語っているように、あきの文学運動と諸活動は極めて多面的であるが、その中の主な事柄を挙げて置こう。まず、婦人と働く女性の解放運動の一環として、紡績女工や農村女性らに働きかけ、後に、紡績歌集

『糸の流れ』、農民歌集『稲の花』などに結実されると共に、第一回日本母親大会（一九五五（昭和三十）年六月）の結成に寄与し、河崎なつ・羽仁説子らと議長団に選ばれるなどの活躍。また、反戦・平和運動では、原水爆

禁止運動・基地反対闘争・安保闘争・侵略戦争反対運動等々にも積極的に参加。国際的な活動では、アジア・アフリカ作家会議東京緊急大会参加などの文学者との国際的交流があり、特に、八〇（昭和五十五）年四月に行つた「氷河」同人達との中国訪問は、歌壇史にとつて特筆すべき友好交流の先駆けと言えよう。

また、あきが構成・演出した定型詩劇「蟹工船」や「八・一五を語る歌人の会」の提唱などは貴重な業績である。作品世界においても、

散りつくし涼しく撓う萩のうえ立待月
はほの明りくる
『牀上の月』

の作品でも判るように、優れた叙景歌も多数あり、晩年の作品の到達の特徴としては、

天の川しらしら流れ地球昏し宇宙の律
ぞいずべに傾く
『牀上の月』

などの作品のように、人間存在の深淵を問い、宇宙の森羅万象的視野での自在な創造を我が物とした事が挙げられる。

夫と共にして来た文学活動の拠点「鍛冶」は、一九六四（昭和三十九）年十一月に「航海者」と改題。その後、七八年七月に季刊同人誌「氷河」を創刊した。その夫婦間は、対等・平等の人格の尊重と相互に学び合い前進するという並々な努力が行われている。

綿入に綿厚く入れこころを入れきみま
もるときわれはふる妻
『紺』

病むきみにつね添うる手のひそかなれ
白鳥老いて霜の羽交す
『流花泉』

花の香のきみが死顔を手につつむ五た
び十たび秋ふかみゆく
『短歌研究』一九八九・四

あきのこのひたぶるな愛、三首目は哲久に對する挽歌であると共に、永久なる恋歌でもあろう。二人は永遠に恋人であった。

終生、恋人であった夫妻

夫と共にして来た文学活動の拠点「鍛冶」は、一九六四（昭和三十九）年十一月に「航海者」と改題。その後、七八年七月に季刊同人誌「氷河」を創刊した。その夫婦間は、対等・平等の人格の尊重と相互に学び合い前進するという並々な努力が行われている。

綿入に綿厚く入れこころを入れきみま
もるときわれはふる妻
『紺』

病むきみにつね添うる手のひそかなれ
白鳥老いて霜の羽交す
『流花泉』

花の香のきみが死顔を手につつむ五た
び十たび秋ふかみゆく
『短歌研究』一九八九・四

あきのこのひたぶるな愛、三首目は哲久に對する挽歌であると共に、永久なる恋歌でもあろう。二人は永遠に恋人であった。

あきは一九九六（平成八）年十一月十四日、九十六歳で逝去した。人生を切り拓き、これほど誠実にかつ人間性豊かに生き、ひたぶるに志と愛を貫いた女性歌人は、これまでになかったと言っても過言ではなからう。

（やまもと・つかさ）『炎』編集・発行人